

霧の犬

『霧の犬』は、書下ろしの表題作の他、『文學界』に掲載された短編二編と、散文詩のようなごく短い書下ろしの作品を収めた作品集である。

収録された作品を順番に見ていこう。まず「カラス」は「大地震」と天津波「アゲハ」は、「野の果て海」の果てを、ふたりして裸でゆるゆる流れる「かのよう」に交わる男女の様子と、彼らが交わす言葉を描いている。初めのうちは、人物に

から歌った「満鉄小唄」を口ずさむ、といった具合で、古語と俚語と方言が混然と溶け合って独特のアメリカムを作りだす。

次の作品「アザイン」は主眼的にいっそう強烈である。これも最初のうちは、主人公の「かれ」が誰で、どんな仕事をしているのか、まったく分からぬまま、語りが進行する。どうやら彼は「カ」について上から落ちてくる何かを受け止める役割をしなければならぬらしい(ちなみに表題の「アザイン」は登山用語で、「懸垂下降」のこと)

であるかを、強く訴えかけている。イスラム国の残虐行為を非難する「文明国」で、そのようなことが行われているのは、いったいどういうことなのか。改めて考えさせられた。

「まんげつ」は全編がひらがなで書かれた小品。こので関西弁の一人称で語る

類を見ない強度

言語的な手ごたえを持った実験的な作品

沼野 充 義

意味。しかし、やがて分かってくるのは、「かれ」がいるのは拘留所の中の刑場であり、「かれ」は絞首刑の執行とともに死刑囚の上の階から、開いた刑壇を通じて落ちてくるのを待ち受けているというのだ。

「人間として最低の仕事」に携わる刑務官の心理を克明に描いたこの作品は、人知をつくした大がかりな「かけ」によって行われる死刑がいかに残酷な殺人行為

男は、送られてきたすっぽんの煮織りを眺めながら、それに、かつて故郷で自撃した、羊の出産の後に残された羊膜を重ね合わせる。そして最後に、この作品集の中で最大の中編「霧の犬」が来る。原稿用紙二〇枚を超える長い作品ではあるが、九五の短い章が積み重ねられていくものの、はっきりとしたプロットが読み取れるわけではない。

「わたし」の個はしばしば四つに分裂した。「じかんのおわりがはじまっている」は、もうはじ

「わたし」の個はしばしば四つに分裂した。「じかんのおわりがはじまっている」は、もうはじ

「わたし」の個はしばしば四つに分裂した。「じかんのおわりがはじまっている」は、もうはじ

文学 芸術

「わたし」の個はしばしば四つに分裂した。「じかんのおわりがはじまっている」は、もうはじ

「わたし」の個はしばしば四つに分裂した。「じかんのおわりがはじまっている」は、もうはじ

「わたし」の個はしばしば四つに分裂した。「じかんのおわりがはじまっている」は、もうはじ

「わたし」の個はしばしば四つに分裂した。「じかんのおわりがはじまっている」は、もうはじ



四六判・263頁・1800円 鉄筆 978-4-907580-02-5

まっていた、おわっているのかもしれなかった——といった、黙示録的な雰囲気

異様な作品だと言ってもいいだろう。言語実験と世界の崩壊が並行し、読者は霧の中に取り残される。難解ではあるが、これほどの言語的な手ごたえを持った実験的な作品は、今の文芸界でめったにお目にかかれるものではない。この作品が提示している逆説は、崩れた世界を崩れかけた言語で描きながら、紛れもない新しい言語世界を創り出しているという点だ。この作品に限らず、他の比較的に短い作品もすべて異様に密度の濃い文体と、そこから立ち上る気迫の鋭さによって圧倒的である。おそろしく、並々ならぬ怒りと絶望を秘めながらも、それを抑えて作品を構築していることとす

る意志から、これらの作品の類を見ない強度が生まれているのだろう。(ぬまの・みつよし氏「東京大学教授・ロシア東欧文学・現代文学論専攻」)

★へんみ・よつ氏は作家。早大卒。著書に「自動起床装置」「もの食う人びと」「詩文集 生首」

「眼の海」「青い花」「言語のえぬ」このために「死刑と新しいファッション」など。一九四四年生。